

[魅力ある特産熱帯果樹の周年生産モデル確立に向けた栽培技術開発]

その他特産熱帯果樹における新たな可能性の検討

～小笠原におけるレイシの生育特性の解明（収穫2年目）～

北山朋裕・吉原恵子・小野 剛*

(小笠原農セ) *現農振事

【要 約】 小笠原諸島では、供試した3品種では、単為結果性のジャカパットを栽培すると収穫に至る。1果重は小さいものの、糖度は高くなる。

【目 的】

国産熱帯果樹としての希少性と嗜好性において期待されるレイシであるが、露地ではオガサワラオオコウモリに食害され、これまで安定的に生産できておらず、基礎的な生育特性が収集できていない。そこで、防獣ネット内露地（以下、露地）や鉄骨ハウス（以下、施設）で、どのような品種が栽培できるか調査する。

【方 法】

以下の2圃場にレイシを定植し、主幹直径や開花数、果実数、果重、糖度等を調査した。なお、収穫は定植3年目を初年とし、灌水や剪定、環状剥皮等は慣行とし、訪花昆虫寄せを設置した。また、対照として、宮崎県産「ジャカパット」10果の果重と糖度を計測した。

1. 露地圃場に「クロバ、ギョッカハウ、ジャカパット」取り木苗を2016年12月に1品種3樹、樹間3.15m、列間2.75mで定植した。

2. 施設圃場に「クロバ、ギョッカハウ」取り木苗を2016年12月に1品種4樹、樹間3.5m、列間2.75mで定植した。

【成果の概要】

1. 定植年から定植4年目までの主幹径および樹高を図1に示した。どの品種も順調に大きくなっており、品種間差はみられなかった。露地と施設とでは、施設の方が大きくなる傾向があるなど、生育に差がみられた。
2. 2020年の開花花穂数と結実数の推移を図2に示した。露地では3月から開花が続き、4月下旬から結実が始まった。「ジャカパット」を除いて、開花・果実肥大はするものの、初期の生理落果とみられる現象で、収穫には至らなかった。高温により花粉稔性が低下しているものと考えられた。対して、唯一収穫できた「ジャカパット」は単為結果性が指摘されていることから、結実したと考えられた。施設では開花したものの、ほとんど結実せず、結実してもすぐに落果した。施設では、露地に比べ気温が高く推移したことから、同様の生理落果がより強く生じたと考えられる。これらは前年も同じ傾向だった。
3. 収穫2年目までの収穫果実数や1果重、糖度を表1に示した。実が大きいことで知られる「ジャカパット」だが、収穫できた実はこの品種の一般的果重40gの半分程度となった。糖度は19度前後であった。

【残された課題・成果の活用・留意点】

1. 今後は施設でも「ジャカパット」を栽培し、結実するか調査する。
2. 2019年台風21号の影響で、露地の「クロバ、ギョッカハウ」が各1株倒伏・枯死した。

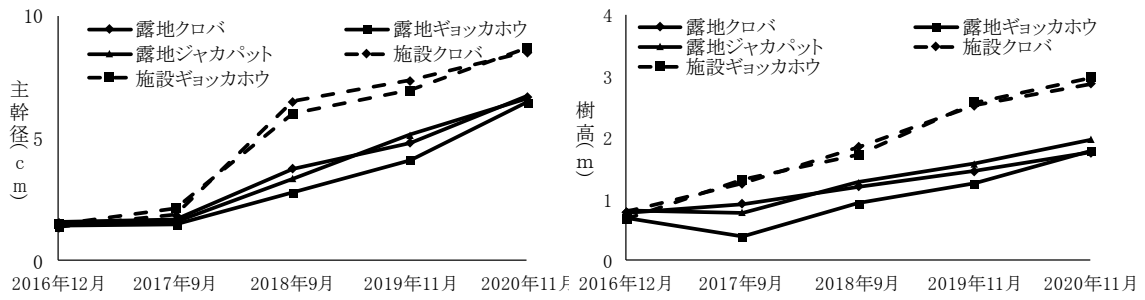


図1 主幹径と樹高の推移

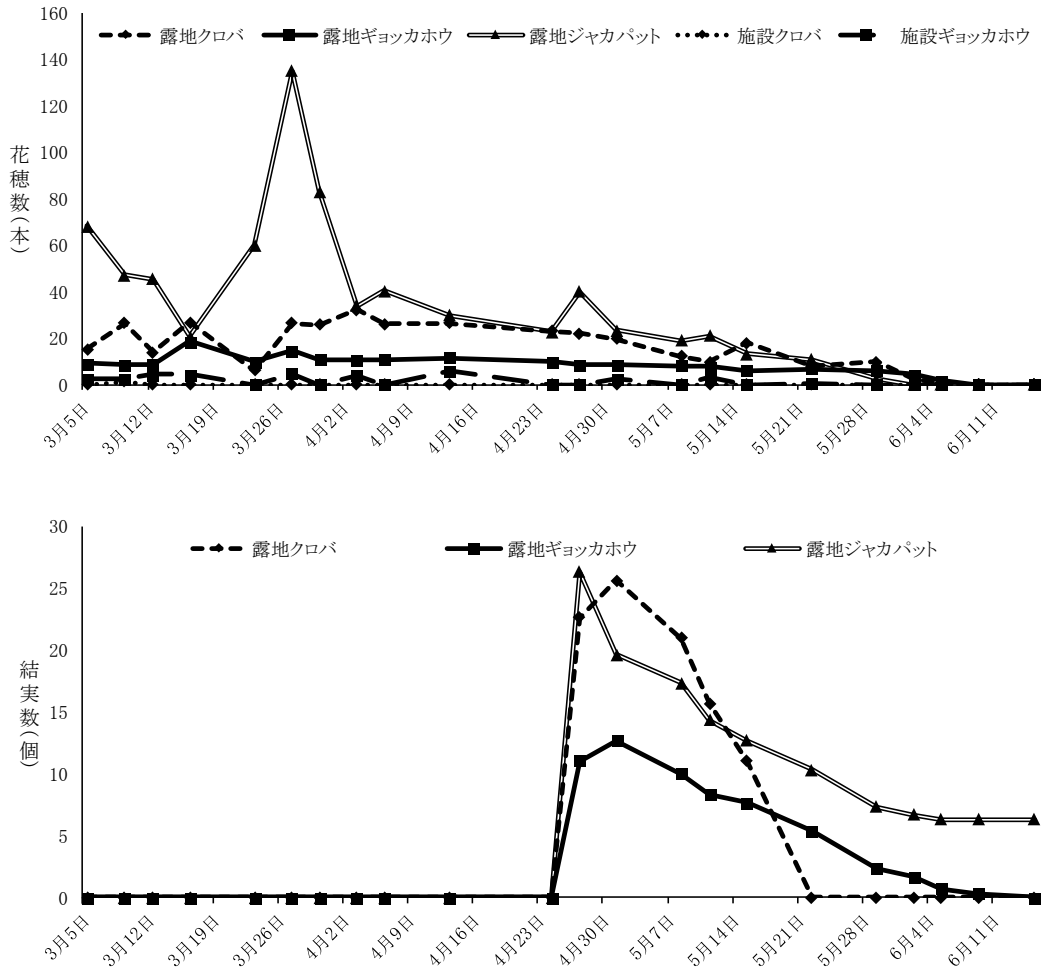


図2 開花花穂数と結実数の推移 (2020年)

表1 露地ジャカパット果実の数量と品質

	果数 (個/樹)	1果重 (g)	糖度 (Brix%)
2020	5.7	14.9	18.6
2019	14.3	22.7	19.8
(参考)2019宮崎		44.6	17.0